

『就実教育実践研究』第14巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2021年3月31日 発行

保育学生による地域子育て支援の取り組み — 立ち上げから今までの成果と課題 —

**Regional Childcare Support Program Led by Students Majoring
in Early Childhood Education and Care
— Effects and issues from the founding to the present —**

松本 希・鎌田雅史・土田耕司
荊木まき子・小谷彰吾・柴川敏之・ズビャーギナ章子
池田明子・山下世史佳・澤津まり子

保育学生による地域子育て支援の取り組み — 立ち上げから今までの成果と課題 —

松本希, 鎌田雅史, 土田耕司, 荊木まき子, 小谷彰吾, 柴川敏之,
ズビャーギナ章子, 池田明子, 山下世史佳, 澤津まり子 (幼児教育学科)

Regional Childcare Support Program Led by Students Majoring in Early Childhood Education and Care — Effects and issues from the founding to the present —

Nozomi MATSUMOTO, Masafumi KAMADA, Koji TODA, Makiko IBARAKI, Shogo KOTANI,
Toshiyuki SHIBAKAWA, ZVYAGINA Akiko, Akiko IKEDA, Yoshika YAMASHITA,
Mariko SAWAZU (Department of Pr eschool Education)

抄録

幼児教育学科では、2006年に保育学生の子育て支援ボランティアグループGBAを結成し、「就実やんちゃキッズ」を開催してきた。今年15年目の節目にあたって、保護者及び学生のアンケート調査を整理し、「就実やんちゃキッズ」の成果と課題をまとめることを目的とした。成果としては、参加者は年々増加傾向にあり、2回以上繰り返して参加している者が多いことがわかり、地域の子育て支援イベントとして定着し、地域の子育て支援の一端を担ってきたものとする。一方で課題は、「学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化」と「全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり」である。「就実やんちゃキッズ」の活動の主体である学生が、子育て支援の視点で計画を立て、その計画に沿って自身の役割を全うするような働きかけが必要であるとする。

キーワード

子育て支援, 保育学生, ボランティア

I, はじめに

本学科では、2006年に子育て支援を目的とした学生ボランティアグループGBA (Girls Be Ambitiousの略, 2010年Girls and Boys be Ambitiousに変更。以下、GBAと呼ぶ)を結成し、2020年で15年目を迎えた。結成当初は、キャラバン隊として保育施設や子育て支援グループなどからの要請を受け、県内の各地に出向いてパネルシアターやオペレッタなどの公演事業を行っていたが、結成3年目の2008年から学内を拠点とした「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」(以下、「就実やんちゃキッズ」と呼ぶ)を開始し、学内外において子育て支援活動を行った。2015年からは学内活動の開催に一本化している。現在、

「就実やんちゃキッズ」は年4回開催しており、毎回400名を超える未就学児とその保護者の参加がある学内における一大イベントとなった。「就実やんちゃキッズ」は、GBAと中四国保育学生研究大会への参加を目的に集まった学生グループ（以下、中四と呼ぶ）とで協力して開催している。我々の持ち得ている資料を調べると、2019年度末までの14年間に117回の「就実やんちゃキッズ」を開催しており、述べ24,472人以上の子どもと保護者が参加している。今まで、年次ごとに「就実やんちゃキッズ」の詳細を活動報告してきた¹⁾
^{2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)}。我々は、毎回の「就実やんちゃキッズ」において、学生及び保護者に対し、活動をより良いものにしていくためにアンケート調査を行っている。加えて、年次の活動報告をまとめる際には、アンケート調査の結果も参考にしながら、活動の主体である学生、参加者である子どもとその保護者、安全管理された会場の提供の3点を総合的に熟考して、次年度の課題を挙げてきた。さらに翌年には、その課題の達成状況を考察している。

本稿では、今までの「就実やんちゃキッズ」に参加した学生及び保護者へのアンケート調査を整理し、年次ごとの課題の達成状況を鑑みながら、今までの「就実やんちゃキッズ」の成果と課題についてまとめることを目的とする。

II、活動の概要

1、学生について

学生には、4月のオリエンテーション期間に、2年生のGBA及び中四のリーダー等によって活動の案内を行い、参加したい人を募っている。GBAの活動は、学生主体のボランティアグループであり、活動への参加は強制ではない。2016年に「就実やんちゃキッズ」の開催回数を8回から4回に減らしたことにより、学生への負担感が減ったのかここ数年は本学科の6割以上がGBAもしくは中四に参加している（図1）。

本学科は短期大学にあるため、学生の活動期間は2年間である。「就実やんちゃキッズ」は概ね5・6・11・1月に開催している。2年生は2年次の7月以降に保育所実習等が始まり、就職活動などでも忙しくなるため、年度の後半（11・1月）は、1年生が主体となって運営する傾向にある。そのため、実質5・6月は1・2年生みんなが2年生が主体となり1年生に引き継ぎをしながら実施し、11・1月は1年生が主体となり2年生がサポートしながら実施するといった運営になっている。

2、参加者（子どもと保護者）について

「就実やんちゃキッズ」は、未就学児の子どもを対象に実施している。我々の調査では、3歳未満の子どもの参加が多いことがわかっている^{3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)}。「就実やんちゃキッズ」の案内は、ポスターの郵送と大学ホームページ等への案内の掲示により実施している。主に岡山市内の保育所・幼稚園・公民館などを中心にポスターを送付している。また、大学ホームページにおいて、年度計画と毎回の開催前に当日のプログラム

等を、開催後に報告を掲載している。後述するが、参加者は、このような広告や参加者からの口コミにより参加しているようである。図2に年度ごとの参加者数の平均値の推移を示す。

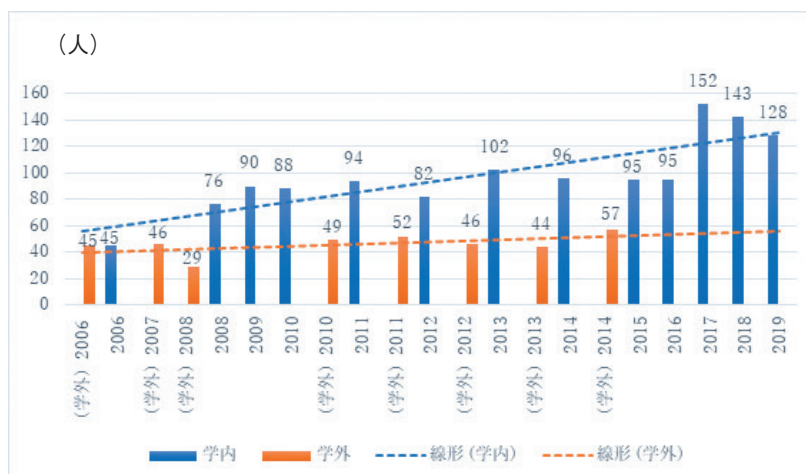


図1 年度ごとにおける参加学生が多かった回の学生数の推移
 *開催月によって参加学生数にばらつきがある。そのため、各年度で最も多く学生が参加していた回の数値を用いた

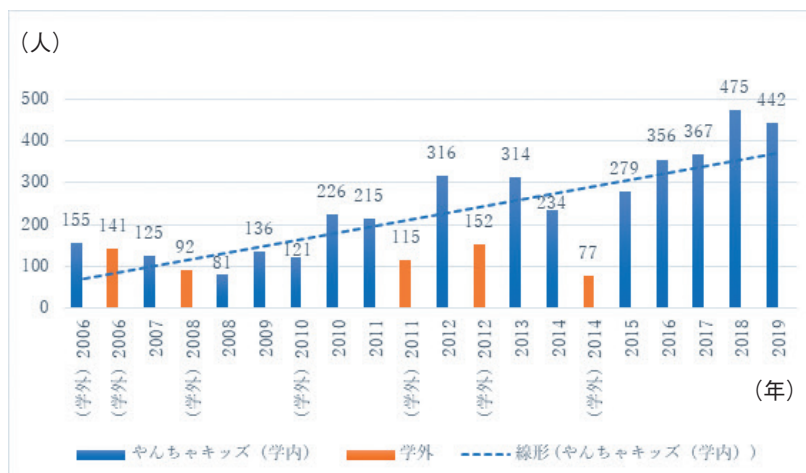


図2 年度ごとの参加者数平均値の推移

3. 活動の内容について

「就実やんちゃキッズ」は、90分間の構成で実施している。前半はパネルシアター・リズム体操・オペレッタ・手遊びを実施し、後半は様々な遊びを用意し、子どもが自分のしたい遊びを選んでもできるように準備している。各遊びには、G B Aと中四の学生が分担して配置されており、学生にとっては直接子どもや保護者と交流のできる場（「交流広場」と呼称）となっている。図3に2019年6月開催時のチラシと交流広場の会場図を示す。

13th Anniversary 第2回 **就実** やんちゃキッズ

SHUJITSU YANCHU KIDS

プログラム

1. ねんごアワー「よむちのちやキッズ」
2. リズム体操「はらおんないんち」
3. 大発表「はらおんないんち」
4. 交流広場「はらおんないんち」

入場無料（予約不要）

2019年度の予定

- 第1回 4月27日(土)
- 第2回 6月22日(土)
- 第3回 11月16日(土)
- 第4回 1月25日(土)

お問い合わせ先：
〒703-8516 岡山市中区西川路1-6-1
電話：086-271-8121（事務局担当）
<http://www.shujitsu.ac.jp>

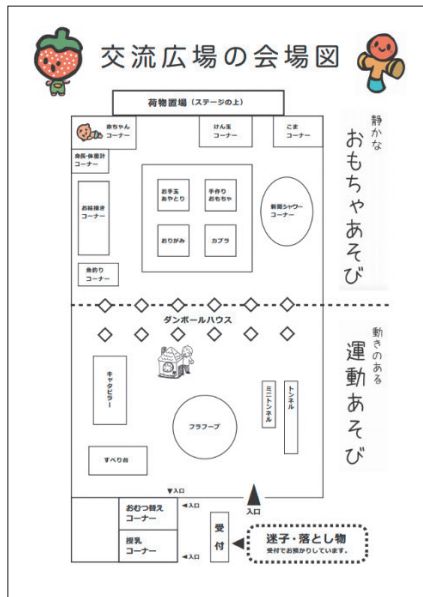


図3 チラシと交流広場の会場図

Ⅲ、アンケート調査の結果

1. アンケート調査について

「就実やんちゃキッズ」では、より良い活動にするために、毎回保護者と学生に対して、アンケート調査を行っている。このアンケート調査は創立の年となる2006年から実施しているが、その内容については回数を重ねるにつれて改善していった。年次ごとのアンケートの分析結果は、活動報告内で公表している^{1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)}。過去の活動報告でのアンケート調査の分析は、その時の保護者や学生のニーズ、「就実やんちゃキッズ」の課題等に合わせて行ってきた。本稿では、同じ形式で回答している項目から、保護者や学生の状況や変遷が分かるものを取り上げる。

2. 保護者アンケート

1) 保護者の満足度

図4は、「また参加したいですか」の問いについての返答であり、保護者の次回以降への参加意思を示したものである。毎年8割近くの保護者が次回以降への参加意思を示していることから、ニーズに応じた活動が継続して運営できていることかがうかがわれる。図2に示した通り、参加者は増加しているが、参加者の増加と保護者の参加意思は関連性を示さないようであり、参加人数の増加によって「就実やんちゃキッズ」の質が落ちることはなく、むしろ保護者としては子育て支援の場を求めており、学生や見守る大人の数が多いため、安心して子どもを遊ばせることができる場を必要としていることを表しているのではないかと考える。

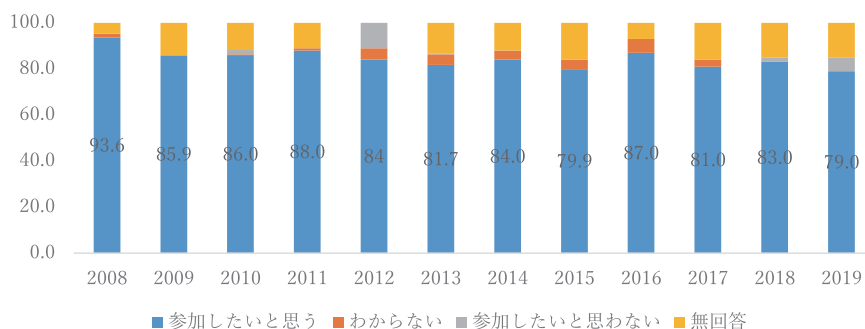


図4 今後の参加意思 (%)

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
参加したいと思う	93.6	85.9	86.0	88.0	84.0	81.7	84.0	79.9	87.0	81.0	83.0	79.0
わからない	1.7	0.0	0.4	1.0	5.0	4.6	4.0	4.2	6.0	3.0	0.0	0.0
参加したいと思わない	0.0	0.0	1.8	0.0	11.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	6.0
無回答	4.7	14.1	11.8	11.0	0.0	13.2	12.0	16.0	7.0	16.0	15.0	15.0

しかしながら、少数ではあるが「参加したいと思わない」や「無回答」の保護者もいる。「就実やんちゃキッズ」の内容や質だけでなく、開催時期や時間、駐車場やトイレの問題など「就実やんちゃキッズ」をより良いものにするためには多くの要素がある。保護者や子どもの意見に慎重に耳を傾けることも重要であると考えている。

2) 参加者のリピート率

図5は、「就実やんちゃキッズ」への参加が、「何回目の参加であるか」を尋ねた問いの結果を示したものである。

初めての参加者と2回以上のリピート参加者がおおよそ半数ずつの結果である。年度によってその割合は若干異なるが、約2割は2回目の参加、約3割が3回以上の参加であると回答している。

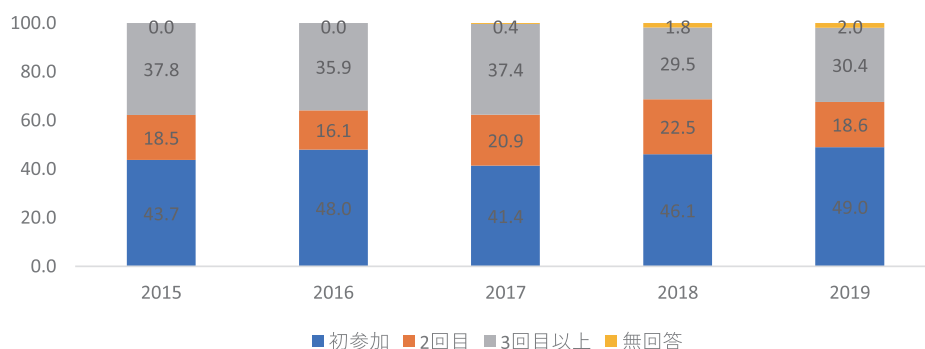


図5 「就実やんちゃキッズ」の参加回数 (%)

3) 人気のあるプログラム

表1は、子ども・保護者のそれぞれに「一番よかったプログラム」を尋ねた問いの結果を示したものである。表中のメインプログラムとは、「就実やんちゃキッズ」の前半を行うパネルシアターやリズム体操、オペレッタのことである。

2015年以降、子ども・保護者共に一番人気が高いのは、「交流広場」である。子どもにおいては、アンケート調査開始当初から「交流広場」が最もよかったプログラムとして選ばれ続けている。子どもが各自の興味関心に従って自由に遊ぶことができる空間の必要性を表している。加えて、学生が考えたり選んだりして準備した遊びが、子どもや保護者の求めるものと一致した結果ともいえる。

表1 一番よかったプログラム

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
保護者	その日のメインプログラム	その日のメインプログラム	その日のメインプログラム	交流広場	交流広場	交流広場	その日のメインプログラム	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場
子ども	ふれあい広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場	交流広場

4) 引率者の変化

図6は、アンケート調査の記入者と子どもとの関係を示したものである。「就実やんちゃキッズ」の創立当初は母親が圧倒的に多かったが、2013年頃から父親の参加が増えている。我々教員が現場にいる実感としても当初は母親と子どもの組み合わせが多かったが、両親と子ども、父親と子どもの組み合わせが増えていることを実感している。このような背景を受けて、2014年度の「就実やんちゃキッズ」からは、それまで一緒に空間に設けていた授乳室とオムツ交換コーナーを分け、母親以外の引率者でも利用しやすい環境を整備した。2010年に厚生労働省は男性の子育て参加や育児休業取得の促進等を目的とした「イクメンプロジェクト」を開始した。男性の育児休暇取得率は、諸外国と比較するとまだ低いものの、2016年度から3%を超えて増加傾向にある¹⁵⁾。男性の育児参加への風潮の高まりもこの結果に反映されているものと考えられる。

5) 「就実やんちゃキッズ」をどのようにして知ったか

図7は、「就実やんちゃキッズ」をどのようにして知ったかを尋ねた問いの結果を示したものである。情報収集の方法は経時的な大きな変化はなく、常に様々な媒体から情報を収集していること、さらに情報化時代にあっても「ポスター」や「知人や関係者からの口コミ」など、従来のアナログ的な情報収集の方法も多いことがわかった。わが国の母子を取り巻く状況として、少子化の進行や核家族化、育児の孤立化が指摘されている（健やか親子21（第2次）¹⁶⁾）。子育て支援の場を必要とする保護者に情報が届くように、様々な手段を使って「就実やんちゃキッズ」の告知をする必要があると考えている。

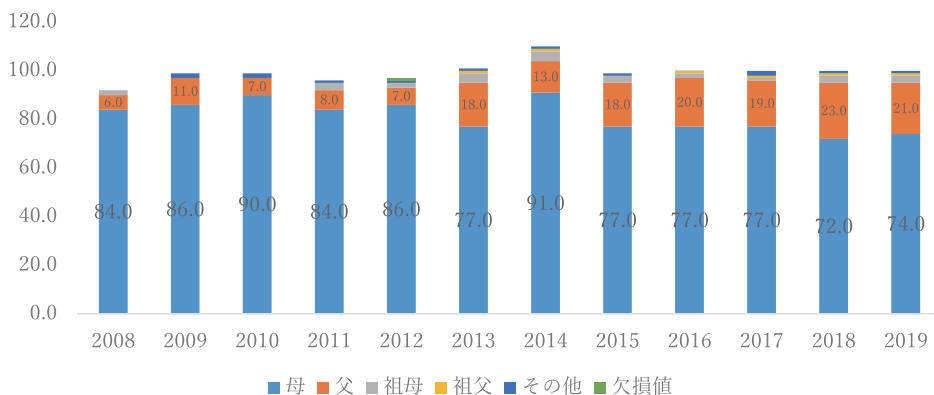


図6 アンケートの記入者

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
母	84.0	86.0	90.0	84.0	86.0	77.0	91.0	77.0	77.0	77.0	72.0	74.0
父	6.0	11.0	7.0	8.0	7.0	18.0	13.0	18.0	20.0	19.0	23.0	21.0
祖母	2.0	0.0	0.0	3.0	2.0	4.0	4.0	3.0	2.0	1.0	3.0	3.0
祖父	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	0.0	1.0	1.0	1.0	1.0
その他	0.0	2.0	2.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.0	2.0	1.0	1.0
欠損値	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

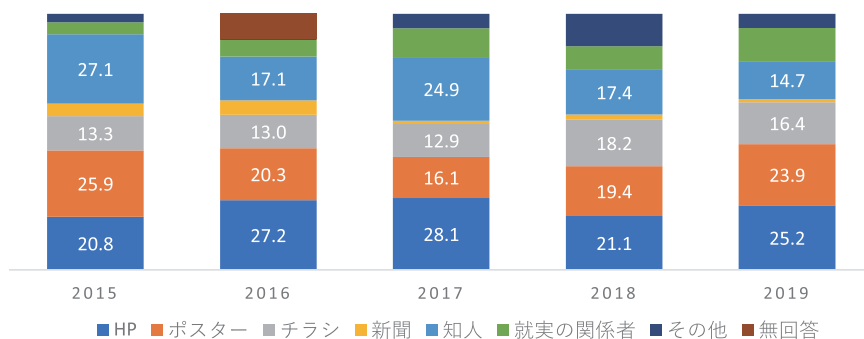


図7 「就実やんちゃキッズ」を知ったきっかけ

	2015	2016	2017	2018	2019
HP	20.8	27.2	28.1	21.1	25.2
ポスター	25.9	20.3	16.1	19.4	23.9
チラシ	13.3	13.0	12.9	18.2	16.4
新聞	4.9	5.7	1.2	2.0	1.3
知人	27.1	17.1	24.9	17.4	14.7
就実の関係者	4.7	6.5	11.2	9.3	13.0
その他	3.3	0.4	5.6	12.6	5.5
無回答	0.0	9.8	0.0	0.0	0.0

3. 学生アンケート

学生へのアンケート調査は、学生自身が活動を振り返り、さらに問題点を抽出し、次回以降の「就実やんちゃキッズ」に活かすきっかけとすることを目的にしている。「就実やんちゃキッズ」終了後に毎回反省会を実施している。その反省会の際に、学生にアンケート用紙を配布し回収している。質問紙は、①公演について振り返り（11項目）、②交流広場（子どもとのふれあい）に関する振り返り（10項目）、③全体に関する満足度の振り返り（2項目）の23の振り返り項目から構成されている。各項目について「あてはまる（5点）」「少しあてはまる（4点）」「どちらでもない（3点）」「ややあてはまらない（2点）」「あてはまらない（1点）」の5件法にて回答を求めている。

2014年度より全体平均の95%信頼区間の推定値が「4：少し当てはまる」に満たない項目については、今年度の学生の課題として捉えることができるため、分析の対象としてきた^{8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)}。これらの学生が考える課題の変遷を見ると、公演についての課題では、「事前準備・練習が良くできた」、「人前で演技することが上手になった」「自分自身で創意工夫した」などの点が4に満たないため、これらの点について課題を感じている回答がどの年度においても常に上位を占めている。

「交流広場」についての課題では、「保護者、高齢者と積極的に交流できた」「自分に自信が持てるようになった」「他人の立場や気持ちを汲み取れるようになった」「遊びのレパートリーが増えた」「新たな課題が見つかった」という意見が、どの年度においても上位を占めている。これらについても、学生は常に課題を感じているということが明らかになった。

反対に、学生の評価が1番良かった項目は、公演において「意識して笑顔ができた」であり、2番目は、2014・2016年度は「自分の役割がきちんと果たせた」、2015・2017～2019年度は「みんなと協力することができた」であった。交流広場において、学生の評価が1番良かった項目は、「自分も楽しく参加できた」であり、2番目は、「子どもと積極的に交流できた」であった。この結果から、学生は公演においては、子どもに笑顔で伝えられたことを最も評価しており、次いで、自分の役割を果たすことから協力することに意識が変化したことが明らかになった。交流広場については、学生は第1に自分自身が楽しく参加することを主眼としており、次に子どもと交流することを評価していた。これらのことから、学生は公演においては、笑顔で自分の役割や他者との協力を意識しており、交流広場では自分自身が楽しむことと子どもとの交流を楽しんでいることが明らかになった。2011年度においても、自由記述であるが、「高齢者とのふれあうことができ、そこへ子ども達も入ってきてくれて、良かったと思いました」や「子どもが笑ってくれたのがうれしかったです。」等、子どもとの交流を評価する回答が見られている。先行研究においても、学生はGBAの活動を社会貢献・自己啓発の機会として捉え、自発的・主体的に取り組むべきものと考えていると報告している^{17) 18)}。

学生のアンケート調査の結果から、学生にとって「就実やんちゃキッズ」は、実際の子どもや保護者と出会う貴重な機会として機能していることが考えられた。また課題につい

ても、例年よく似た傾向にあることから、保育学生として本学科に入学し、子育て支援活動を実施する中で多くの学生が抱えるこの課題は、言わば保育者として成長していくための『過程の課題』であると考えられる。これらの自身が認識した課題をどのように改善し、克服するよう努力するか、また授業や実習での学びを積み重ねていくかが重要である。これらの課題を乗り越えていくことで保育者としての一步を踏み出せると考える。本学科には、GBAや中四に参加していない学生もいるが、そのような学生においても子どもや保護者に関わる機会を持ち、課題意識を持って改善に取り組むことが重要であると考えられる。

IV、「就実やんちゃキッズ」の成果と課題

1、「就実やんちゃキッズ」の成果

「就実やんちゃキッズ」の始まりは、2006年に「備前地域子育てキャラバン事業」として、学生・行政・NPO等が協働して地域ぐるみの子育て支援体制を構築していくことを目的として岡山県の委託事業としてスタートした。初年度の成果として、人材育成の面では、学生の学習意欲の喚起、問題解決能力を鍛える学びの場となり、地域貢献の面では、過疎化が進行している地域の子育て支援機関を活気づけたと報告した²⁾。この「子育てキャラバン事業」が定着していくと、学内においても「就実やんちゃキッズ」を開催するようになった。本事業は、立ち上げ時から現在まで平均参加者数は、増加し続けている(図2)。加えて、今までの述べ参加人数は、約24,000名を超えており、多くの地域の親子や関係の方々に参加している。その中でも全体の約半数が2回以上繰り返し参加している(図5)。これらのことから、15年間続いていること、参加者が増加し続けていること、リピート参加者が多いことを考慮すると、地域の子育て支援イベントとして定着し、地域の子育て支援の一端を担ってきたものと考えたい。

保護者を対象としたアンケート調査の結果をみると、ほとんどの保護者から肯定的な意見を得ることができている。このことは、リピート参加者が多いことから裏打ちされていると考える。多くのボランティア学生が参加しているため、子どもたちはお兄さん・お姉さんに関わる機会が多くあるので、保護者にとっては見守る人が多いことに安心感があるようである。また、アンケート調査の意見や感想を求める自由記述の欄をみると、「就実やんちゃキッズ」に参加することで子どもが喜ぶ遊びや遊びのアイデアがわかった、公演を楽しむ姿や家ではできないような遊びをする姿を見ることができた等の記述が多い。「就実やんちゃキッズ」に参加することで、自身の子どもに対する新しい発見があったのではないかと予測する。「就実やんちゃキッズ」は3歳未満の子どもたちの参加が多い^{4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)}ため、直接子どもの感想を聞くことは難しいが、場を共有した子どもや学生たちが互いに笑顔を交わしながら遊んだことが、楽しい記憶として残ることを願っている。

「就実やんちゃキッズ」が学生に与えている効果を考えると、一番は、学生が実際に子どもと触れ合える機会が持てることである。保育学生として、本分の授業で子どもの発育

発達や遊びを通した保育が重要であることを習うが、実際に目の前で見て、確認して、一緒に過ごすことができることは、他に変えられない生きた経験となる。加えて、授業で作製したり習ったりした保育小物や表現技術を披露し、子どもの反応を見て、次回に改善ができる。どのように子どもや保護者に声をかけ、関わればよいか、どのようにしたら興味を持って一緒に遊ぶことができるかを試行錯誤しながら関わるることができる「就実やんちゃキッズ」は、本学科の大きな財産である。学生は、「就実やんちゃキッズ」を開催するにあたって、役割分担を行い、企画・準備・運用・改善を行っている。「就実やんちゃキッズ」の当日まで学生は何度も準備と練習を繰り返す。直前のリハーサルでは学生同士、忌憚のない意見を出し合い、最後まで改善を試みる。子どもに完成度の高い公演を披露するために誠実に努力することは、保育者・教育者になる者として必要な経験であると考え。毎年、GBAや中四への参加を希望する学生は絶えることはない。保育者を目指す学生にとっても有意義であり、参加の必要性を感じているものと推察する。

一方で、教員の視点に立つと「就実やんちゃキッズ」の開催は、授業では教えきれない内容を伝えることができる場になっている。またそれ以上に、学生の成長を直にみることができ、授業ではわからない学生の良い面を発見することができることも大きな利点であると考え。さらに、学生が子どもや保護者に見せる配慮や公演を成功させるための努力を、適宜労い励ますことは、本学科の教育効果を上げていると考える。その他にも、本学科を受験する高校生の多くは、「就実やんちゃキッズの活動に魅力を感じた」と志望動機に挙げている。高校生にとっても、「就実やんちゃキッズ」の参加によって、子どもや保護者と触れ合う機会があること、公演活動を経験できることは魅力と感じているようである。「就実やんちゃキッズ」の開催は、学科の広報活動の一端をになっている。

「就実やんちゃキッズ」は、参加者の事故やケガに対応するために賠償責任保険に加入しており、その他にも救急セットを常に会場内に設置している。しかしながら、「就実やんちゃキッズ」内で救急セットを使う場面はほとんど無い。多くの子どもが参加するため、学生には子どもが安全に遊べるよう、特に配慮するよう伝え、それが実行できているからであると考え。また過去に、賠償責任保険を利用するような怪我（子ども同士の衝突による怪我）が1件のみであったことは、学生の配慮と保護者の協力によるところが大きい。多くの参加者が集うイベントでありながら、今まで大きな事故や怪我が発生せず、安全に配慮したイベントが実施できていることは特筆できる点であると考え。将来、保育者になる者として、子どもの命を守ることの重要性を伝え続け、今後も引き続き、安全と安心を提供できるイベントになるよう特に注意していきたい。

2. 「就実やんちゃキッズ」の課題

毎年担当教員が就実論叢に「就実やんちゃキッズ」の活動報告を残してきた^{1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14)}。その中で、教員は、学生や参加者の様子やアンケート調査の結果、安全面を考察しながら、毎年、次年度の課題をあげ、該当年度はその課題を意識して、学

生を見守り、指導しながら実施してきた。さらに次年度の活動報告において、該当年度の課題が達成されたか評価を行っている。今までの課題の一覧を表2に示す。

課題の内容は少しずつ変化している。当初は、事業の定着や拡大に関する課題が多かったが、その後、学生を主体とした運用方法の模索や、音響の改善など、より良い「就実やんちゃキッズ」の運営を考えるハード面の課題に変わっていった。ここ数年では、「学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化」と「全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり」のソフト面での課題を挙げている。この2つの課題は数年に渡って挙げられているが、まだ課題の達成・解決に至っていない。

毎年度の課題については、改善するよう努めている。運営方法等のマニュアル化を行い、使用する物品の改善、大学周辺での事故を防ぐために大学前の横断歩道に警備員の配置などを行ってきた。就実やんちゃキッズ実施のための基盤は整ってきたように考える。しかしながら、人的面では、短期大学生である学生が主体となって行っているため、限られた2年間の学生生活の中で、運営方法を理解し、公演活動を充実させ、それらを後輩に引き継いでいくことに困難さを感じることも多い。加えて、担当教員への負担も大きい。そのため、「学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化」の課題を挙げている。「就実やんちゃキッズ」は、学科のイベントに準じた形で実施し、GBAや中四の活動も学科として支援している。参加学生が急増したことにより、「みんなが参加しているから参加している」学生が増え、全員が同じような主体性を持ち合わせているとは言い難い。加えて、2015年より「出前やんちゃキッズ」を取りやめ、年4回の学内での実施へと変更した。そのため、次の「就実やんちゃキッズ」までの間隔が長くなり、緊張感や準備が分断されがちである。それぞれがGBAや中四の一員として、2年間の計画を立て、その計画に沿って自身や所属グループの役割を全うするような働きかけが必要であると考えます。

「就実やんちゃキッズ」は、未就学児を対象としてイベントを実施しているため、0歳児から5歳児までの発育発達の差の大きい年代の子どもが集まることになる。子どもが自身の興味関心を持つものを見つけ、学生とだけでなく、学生を介しながら父母とも一緒に楽しさを共有してほしいと考えている。本事業は子育て支援イベントであり、参加する学生の成長だけを願うものではなく、「子育ての支援」を第一に考えている。子ども達が安全で安心して遊ばせることのできる場の提供はもちろんのこと、子どもの成長を感じられる内容や仲間づくりができるような仕組みを取り入れていくことにより、父母にとっても有益なイベントになることが、今後一層求められていると考えている。

V、おわりに

本稿は、「就実やんちゃキッズ」の成果と課題をアンケート調査及び過去の報告書の結果を踏まえて、考察してきた。「就実やんちゃキッズ」に参加する子どもや保護者、GBAや中四に参加する学生が途切れることなく14年間続いたことが大きな成果であると考えます。2020年度は、GBA結成から15年目を迎える節目の年であった。しかしながら、新型

コロナウイルス感染症の流行により、余儀なく活動が中止となっている。子育て支援活動を行うことができず、子どもの遊ぶ機会の提供ができないことは悲嘆であるとともに、「就実やんちゃキッズ」での活動を楽しみにしていた学生にも大きな落胆を与えている。with コロナ・post コロナというような言葉も出てき始め、コロナ禍及びコロナ収束後の「就実やんちゃキッズ」の在り方を検討しなければならない。本稿をまとめるにあたり、過去の報告書を読み進めると、GBA結成当初からの紆余曲折や当時の学生及び教員が意見を出し合い、共通の目的に向かい奮闘した様子がうかがえる。この結成から今までの積み重ねこそがまた今までの大きな成果であり、これからの「就実やんちゃキッズ」の再出発のために重要な道標になると考える。

表2 各年度の課題

年度	課題
2007	卒業生や子育て支援機関スタッフなどとの協力を強化・定着させる
	プログラムの多様化
2008	取り組みへの参加が学生に及ぼす影響・効果について検証
	活動の充実に伴って経費などの制限から学外からの公演依頼に答えきれなくなってきた事態へ対応する
	保護者アンケートの結果を学生へ迅速にフィードバックする方法を導入する 学生自身による主体的な活動のマネジメント方式を導入する
2009	広報活動の強化
	地域活性化への貢献
	学生参加数の拡大促進 事業に関する情報の管理と共有化
2010	学生の資質向上
	世代間交流の充実
	学生参加数の拡大促進 子育て支援ボランティアの原点に帰って
2011	学生マネージャーの役割強化
	倉庫の整理整頓
	OGによる協力支援体制
	5年間の総括 ①真のリーダーシップを発揮できる学生リーダーの育成 ②マニュアル化の徹底 ③電子掲示板による情報の共有化及び蓄積
2012	学生間のグループ編成
	プログラムの改善
	増加する参加者への対応と安全確保 インターネットを介した本活動の情報発信
2013	増加する参加者への対応と安全確保
	学生間の協力体制 著作権及び死を扱うプログラムの扱い方
2014	全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境作り
	公演演目の決定と内容の確認について 公演における音響について
2015	駐車場改善について
	全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり
2016	10周年における「就実やんちゃキッズ」の見直し
	学生間の報告・連絡・相談体制の充実 全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり
2017	学科の教育カリキュラムとの連動
	新体制での安定化 全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり
2018	学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化
	GBAという組織の見直しとそれに伴う活動の合理化 全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり
2019	全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり
	学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化 2年生から1年生への持続的発展に向けた引継ぎ体制の強化
2020 (未開催)	全ての引率者が子どもと一緒に参加しやすい環境づくり
	学生の主体性の確保とそれに伴う活動の質の安定化 公演内容の充実

VI. 参考文献

- 1) 村田恵子, 澤津まり子, 立石あつ子 (2006). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－備前地域子育てキャラバン事業報告－, 就実論叢, 36 (社会篇), pp.135-152.
- 2) 澤津まり子, 永田彰子, 田中誠, 立石あつ子 (2007). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2007年度活動報告－, 就実論叢, 37 (社会篇), pp.81-98.
- 3) 澤津まり子, 堤幸一, 立石あつ子, 伊藤真, 笹倉千佳弘, 田中誠, 永田彰子, 山根薫子, Z.山田章子 (2008). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2008年度活動報告－, 就実論叢, 38 (社会篇), pp.285-298.
- 4) 澤津まり子, 伊藤真, 堤幸一, 立石あつ子, 笹倉千佳弘, Z.山田章子, 田中誠, 山根薫子 (2009). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2009年度活動報告－, 就実論叢, 39, pp.233-247.
- 5) 澤津まり子, 立石あつ子, 柴川敏之, 秋山真理子, 堤幸一, 笹倉千佳弘, 田中誠, 山根薫子 (2011). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2010年度活動報告－, 就実論叢, 40, pp.163-172.
- 6) 澤津まり子, 柴川敏之, 松本希, 鎌田雅史, Z.山田章子, 秋山真理子, 笹倉千佳弘, 田中誠, 山根薫子 (2012). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2011年度活動報告－, 就実論叢, 41, pp.175-186.
- 7) 松本希, 柴川敏之, 澤津まり子, 鎌田雅史, 田中誠, 秋山真理子, Z.山田章子, 笹倉千佳弘, 山根薫子 (2013). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2012年度活動報告－, 就実論叢, 42, pp.161-174.
- 8) 松本希, 田中誠, 澤津まり子, 鎌田雅史, 秋山真理子, 笹倉千佳弘, 柴川敏之, Z.山田章子, 山根薫子 (2014). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2013年度活動報告－, 就実論叢, 43, pp.325-336.
- 9) 田中誠, 秋山真理子, 鎌田雅史, 蔵永瞳, 澤津まり子, 笹倉千佳弘, 柴川敏之, Z.山田章子, 松本希, 山根薫子 (2015). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2014年度活動報告－, 就実論叢, 44, pp.291-301.
- 10) 秋山真理子, 鎌田雅史, 柴川敏之, 蔵永瞳, 笹倉千佳弘, 澤津まり子, Z.山田章子, 田中誠, 山根薫子 (2016). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2015年度活動報告－, 就実論叢, 45, pp.209-223.
- 11) Z.山田章子, 鎌田雅史, 松本希, 伊藤優, 荊木まき子, 笹倉千佳弘, 柴川敏之, 秋山真理子, 澤津まり子, 田中誠 (2017). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2016年度活動報告－, 就実論叢, 46, pp.187-198.
- 12) ズビャーギナ山田章子, 笹倉千佳弘, 荊木まき子, 松本希, 柴川敏之, 伊藤優, 秋山真理子, 鎌田雅史, 田中誠, 澤津まり子, (2018). 保育学生による地域子育て支援の取り組み－2017年度活動報告－, 就実論叢, 47, pp.199-210.
- 13) 荊木まき子, 鎌田雅史, 松本希, ズビャーギナ章子, 小谷彰吾, 土田耕司, 伊藤優,

- 秋山真理子, 柴川敏之, 澤津まり子, (2019). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2018年度活動報告—, 就実論叢, 48, pp.173-186.
- 14) 土田耕司, 鎌田雅史, 小谷彰吾, 荊木まき子, ズビャーギナ章子, 松本希, 柴川敏之, 池田明子, 秋山真理子, 澤津まり子, (2020). 保育学生による地域子育て支援の取り組み—2019年度活動報告—, 就実論叢, 49, pp.99-110.
- 15) 厚生労働省. 平成30年版厚生労働白書, <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/18/backdata/02-01-08-01.html> (参照2021年1月10日)
- 16) 厚生労働省. 健やか親子21 (第二次) ホームページ, <http://www.sukoyaka21.jp> (参照2021年1月10日)
- 17) 堤幸一, 村田恵子, 立石あつ子, 澤津まり子, (2008). 短期大学保育学生におけるボランティア活動の動機分析—継続動機を中心として—, 就実教育実践研究, 1, pp.85-94.
- 18) 堤幸一, 澤津まり子, 立石あつ子, (2009). 短期大学保育学生におけるボランティア活動の動機分析Ⅱ—動機づけ構造と参加決定因を中心として—, 就実教育実践研究, 2, pp.55-64.